ジャカルタで、学びをつなぐ、教師をつなぐ

国際交流基金ジャカルタ日本文化センター
谷畑　佳織

私は 2024 年 9 月より日本語指導助手（特定技能）として国際交流基金ジャカルタ日本文化センター(以下、JFJA)に派遣され、1 年半になります。私が所属する日本語班には 2026 年 4 月現在、日本語上級専門家・日本語専門家（以下、「専門家」と総称）が 5 名派遣されており、日々多くの専門家からサポートを受けながら業務を行っています。

私は日本語指導助手（特定技能）という名前の通り、特定技能制度に関わる日本語教育機関や教師への支援を主な業務としています。具体的には、外国人材チームの一員として、インドネシア人日本語教師向け『いろどり 生活の日本語』(以下、『いろどり』)教授法ワークショップの企画・運営の補佐や、機関訪問を通じて教材・JFJA の助成事業の紹介、教師のネットワークを作るオンラインイベント「学びの広場」の企画・運営などを行ってきました。また新しい企画として立ち上がった「『いろどり』日本語講座」の企画・運営の補佐及び講師を務めました。

ここでは、「学びの広場」や機関訪問、『いろどり』日本語講座について報告したいと思います。

教師ネットワーク形成「学びの広場」

業務の中で、企画から運営まで担当し中心的に取り組んだのが、インドネシア人日本語教師を対象としたオンライン交流イベント「学びの広場」です。専門家やチームの方々にアドバイスをいただきながら、3 か月に 1 回のペースで開催しています。本イベントは、以前派遣されていた生活日本語コーディネーターから引き継いだものであり、これまでの取り組みを踏まえつつ、現地のニーズに合う形へと内容を少し見直しました。

現地教師からは「授業をより楽しく、スムーズに進めたい」「学生のモチベーションアップの方法が知りたい」という声が機関訪問やワークショップの質疑応答を通して多く聞かれたため、授業で活用できる便利な IT ツールやウェブサイトの紹介などをテーマに選びました。「明日から授業へ導入できる、使える」を目指し、パワーポイントなどを用いた教材作成の工夫や具体的な活動例も共有しています。

例えば、2026 年 2 月 26 日に行った際は、テーマを「授業で使えるアイスブレイク」とし、すぐに使えるアイスブレイクを 4 つほど紹介し参加者にも実際に体験してもらいました。断食期間中だったにも関わらず、41 名の方に参加していただきました。アンケートでは「すぐに授業で試したい」という声もあり、教室での実践につながる機会を提供できたと感じています。私自身も参加者から斬新なアイデアを頂けることも多く、教師同士がつながる場の大切さを実感しました。

今後もこの「学びの広場」を通して、参加者同士が情報交換を行える、新たなつながりを作れる場を提供していければと考えています。

2026 年 2 月 26 日の学びの広場の様子

機関訪問を通じた現場支援

機関訪問を通じた教師支援にも取り組みました。インドネシアには多数の送り出し機関が存在します。その中でもフォローアップが必要な機関を選定し、訪問先の機関と打ち合わせをしながら訪問の計画を立てる作業は最初大変でしたが、だんだんスムーズに業務に取り組めるようになりました。そして、送り出し機関を訪問し、『いろどり』の紹介や補助教材の活用方法、助成事業の情報提供を行うとともに、授業見学や教師との意見交換を行いました。現場で直接話を聞くことで、機関ごとに異なる課題やニーズを具体的に知ることができ、それに応じた支援の必要性を学びました。一方で、限られた時間の中で信頼関係を築く難しさや、状況に応じた柔軟な対応の大切さも感じています。

内部向け日本語講座の試験的実施

さらに、JFJA では試験的な取り組みとして、2025 年 11 月から 2026 年 1 月にかけて内部職員向けの『いろどり』日本語講座を実施しました。この講座は一般学習者向け講座開講に向けてのパイロット講座として行われたもので、私は企画・運営の補佐に加え、『いろどり』入門を使用し全 6 回のうち 2 回の授業の講師を担当しました。講座の立ち上げから関わる中で、教材の意図を意識した授業設計や参加者の反応を見ながら進行を調整することの大切さを実践的に学びました。今まで『いろどり』を普及するうえで、『いろどり』を使って実際に授業をしたことがなかったのですが、この経験を得たことで、よりワークショップの参加者や機関訪問先での相談に親身になることができ、『いろどり』について理解を深めることにつながったと感じます。

内部向け日本語講座の授業中の様子

1 年半の振り返りと今後に向けて

JFJA には今まで日本語指導助手(特定技能)というポジションはなく、派遣前は不安でいっぱいだったものの、あっという間にジャカルタに赴任してから 1 年半が経ちました。

インドネシアは他のアジア拠点と比べても、送り出し機関の数も送り出し人数もかなり多いので、はじめは業務の幅の広さ、出張の多さに体がついていかないときもありましたが、今はここで教育支援の場に関われたことは、とても自身の学びにつながったと感謝しています。それも、JFJA 内の皆様の温かいご支援があってのことだと思っております。

日本語班の一員として、新たな業務の立ち上げに関わり、教材作成に取り組むなど多くの業務に携われる機会が多い 1 年半でした。これまでの活動を通して、教師支援には一方的な情報提供だけではなく、相手の状況に寄り添いながら共に考える姿勢が大切なのだということを、実感を伴って学ぶことができました。

一方で、授業設計やイベント運営については、まだまだ実力不足であり、今後も経験を重ねていく必要があると感じます。残り半年の任期では、これまで築いてきた教師とのつながりを大切にしながら、より現場のニーズに即した支援を行うとともに、自身の経験を次につなげられるようにしていきたいと考えています。

以上